

V . 円海山近郊緑地特別保全地区の保安全管理指針

1 . 目標実現のための進め方

現在の植生から目標植生に近づけていくために、順応的管理（調査結果から計画を見直す管理方法）を行う。

(1) 本計画の位置づけ

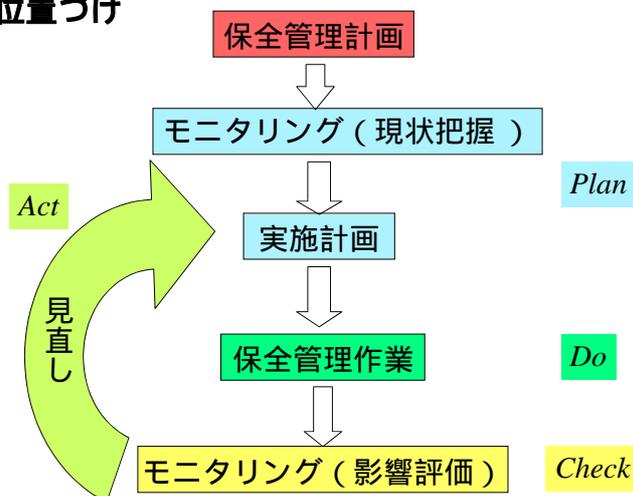


図 29 . 本計画から実施計画、作業、モニタリングの流れ

* 既に現状把握できている場所は、その結果を基に実施計画を作成する。

(2) 市民団体が保安全管理作業を進める際の役割分担と作業項目の例

ここでは、実際の保安全管理作業を市民と行政が協働で行う場合についてまとめる。

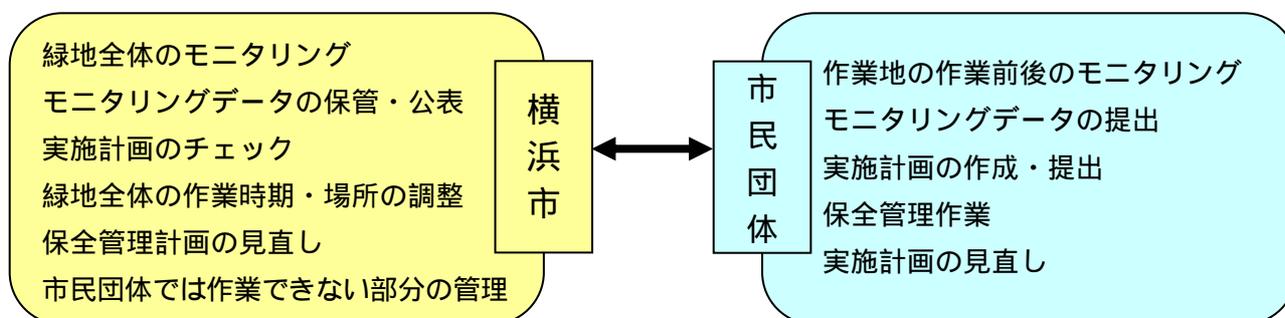


図 30 . 保安全管理を進める際の役割分担

市民団体：森づくりボランティア団体等

(i) 実施計画づくり

- ・市民団体は、作業に入る前に現況を把握し、管理者である横浜市と調整のうえ、緑地全体の目標・ゾーニング・保安全管理作業指針に沿って、保安全管理作業の実施計画をつくる。
- ・実施計画は、技術的な保安全管理指針（p.20～p.30）に注意して作成する。

(ii) 管理作業の調整

- ・横浜市は、広い面積で短期間に高木が伐採されないように、また、様々な林齢の樹林がモザイク状になるように、複数の管理作業団体による管理作業の場所・時期(年)などを調整する。

(iii) モニタリング

ア 各管理作業地について

- ・管理作業を行っている場所では、その場所の林相・指標生物の、作業前後のモニタリング調査を、市民団体が行き、記録をとり、横浜市に提出する。(調査は、共通の方法で行う。資料編参照。)
- ・作業前のモニタリングは、5年以内(林相については10年以内)に行われた調査結果が横浜市に記録されている場合には、現況調査の全部または一部を省略することができる。
- ・生物の調査など、市民団体がモニタリングすることが難しい場合には、横浜市と調整し、調査する。

イ 緑地全体について

- ・横浜市は、
 - ・生物多様性のモニタリング
 - ・源流ゾーンについては、乾燥化・土壌堆積のモニタリングを行う。
- ・横浜市は、モニタリングで得られた生物情報を長期間保管し、公表する。但し、密猟・盗掘などにより、生物の保全に悪い影響の出る可能性のある希少生物や、繁殖場所に関する情報は、公表しない。

(iv) 実施計画および保全管理計画の見直し

ア 各管理作業地について

- ・市民団体は、管理作業地のモニタリングの結果を踏まえ、横浜市と調整の上、実施計画を見直す。

イ 緑地全体について

- ・横浜市は、緑地全体のゾーニングおよび作業指針等の保全管理計画は、新しい知見などを取り入れ、社会情勢の変化などによって、見直しをしていく。

2 . 技術的な保全管理指針

近郊緑地特別保全地区の将来の目標植生に向けて、人が手を入れる場合の技術的な指針を記載する。目標植生に向けて自然の遷移にまかせる方法もある。

i) 全体指針

(1) 生物多様性保全のための保護・管理

ア 希少生物

- ・管理作業前に、希少生物の確認調査を行い、管理作業地内に希少生物が生息する場合、その生物に配慮する。特に作業に入る初年度は、年間通して、希少生物に注意し、種類・分布・数などの記録を残す。
- ・実施計画策定後に希少な生物を発見したり、管理作業の結果希少な植物が生えてきた場合には、保全するための計画に修正する（希少な生物は、環境省・神奈川県レッドデータおよび「横浜の植物」を参考にする）。
- ・希少な生物が生息している場所（図 31・32）の周辺では、短期間に広範囲な管理作業は行わない。また、管理作業前と作業中に希少生物のモニタリングを行い、管理作業後も定期的にモニタリングを行う。草の除去（図 31）や、高木・低木の環境を短期間に大きく変化させない（図 32）などの注意が必要な場所では、注意しながら管理作業を行う。
- ・希少生物などの保全を図るためには、外来生物対策も必要となるため、希少生物など在来生物に対するモニタリングだけでなく、外来生物に対するモニタリングも行い、必要に応じてその対策を検討する。

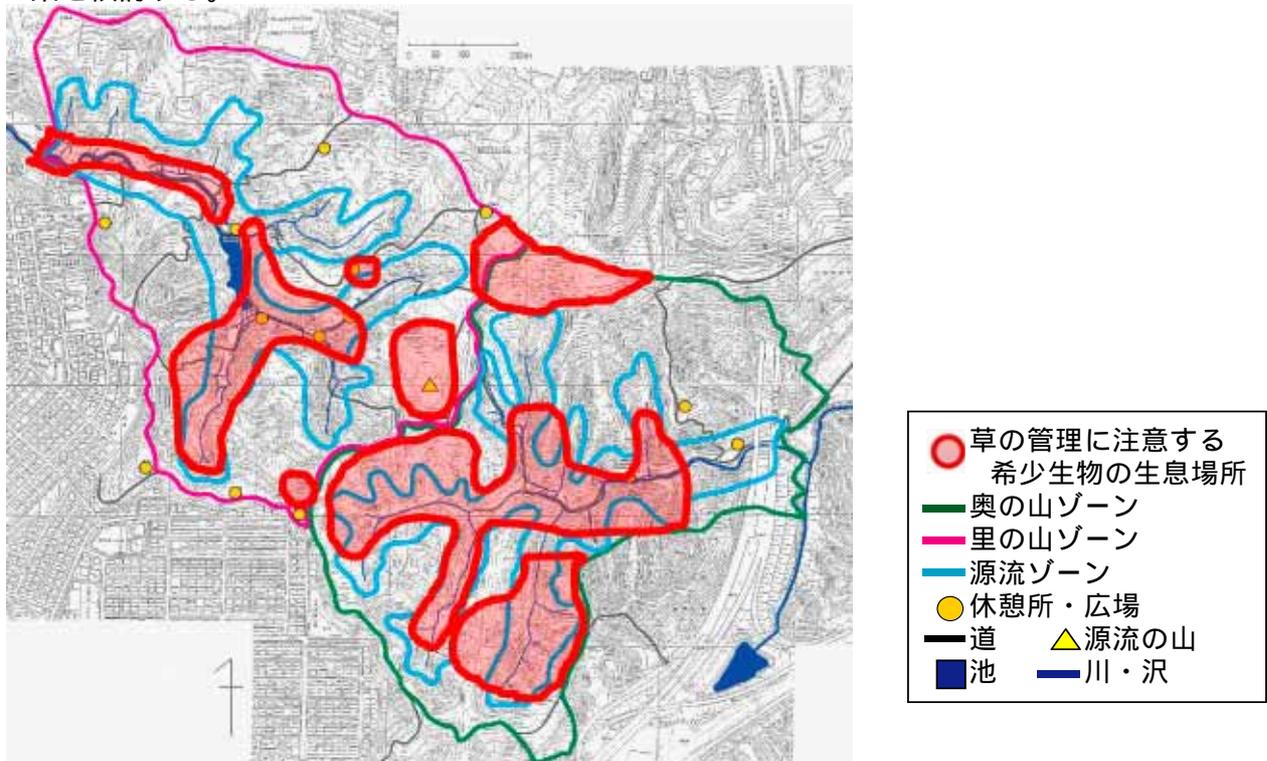


図 31 . 希少生物が生息しているため草を管理する際に注意する場所

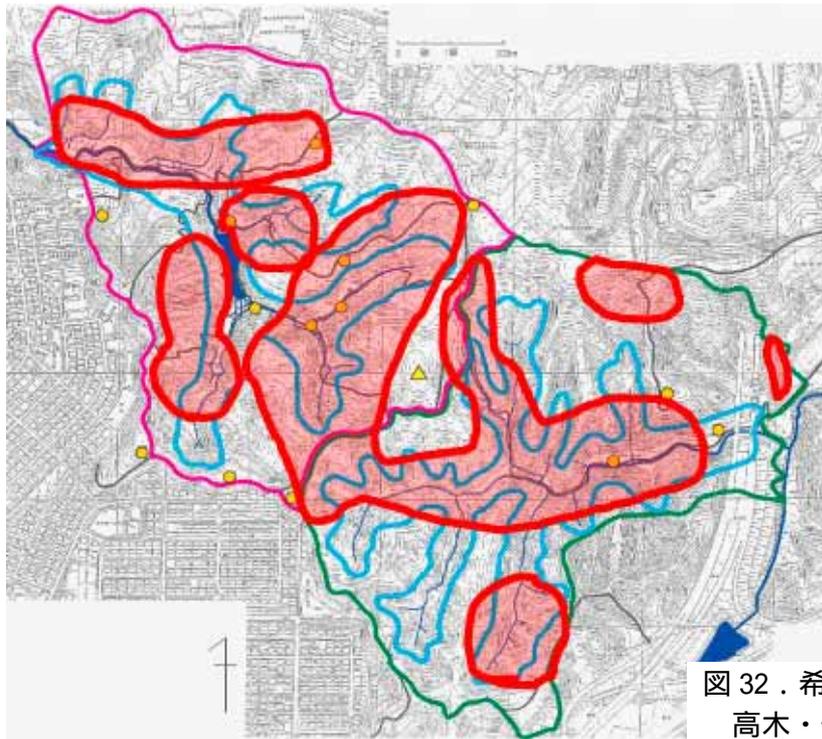


図 32 . 希少生物が生息しているため
高木・低木の管理の際に注意する場所

イ 他地域からの生物移入

- ・外国の動植物や日本の他の場所の動植物（円海山周辺の緑地に生息する種類と同じ動植物であっても、離れた緑地の動植物）は持ち込まない。
- ・植栽の際は、できるだけ円海山周辺の緑地の種子から育てた苗・山採りした幼木(地域性種苗)を使う。

ウ 土壌動物

- ・現在土壌動物の多様性が高い場所（図 33）では、短期間に広範囲な管理作業は行わない。作業前および作業後定期的に土壌動物をモニタリングする。また、乾燥・土壌流出・落葉の欠如等が起こらないよう、注意しながら管理作業を行う。

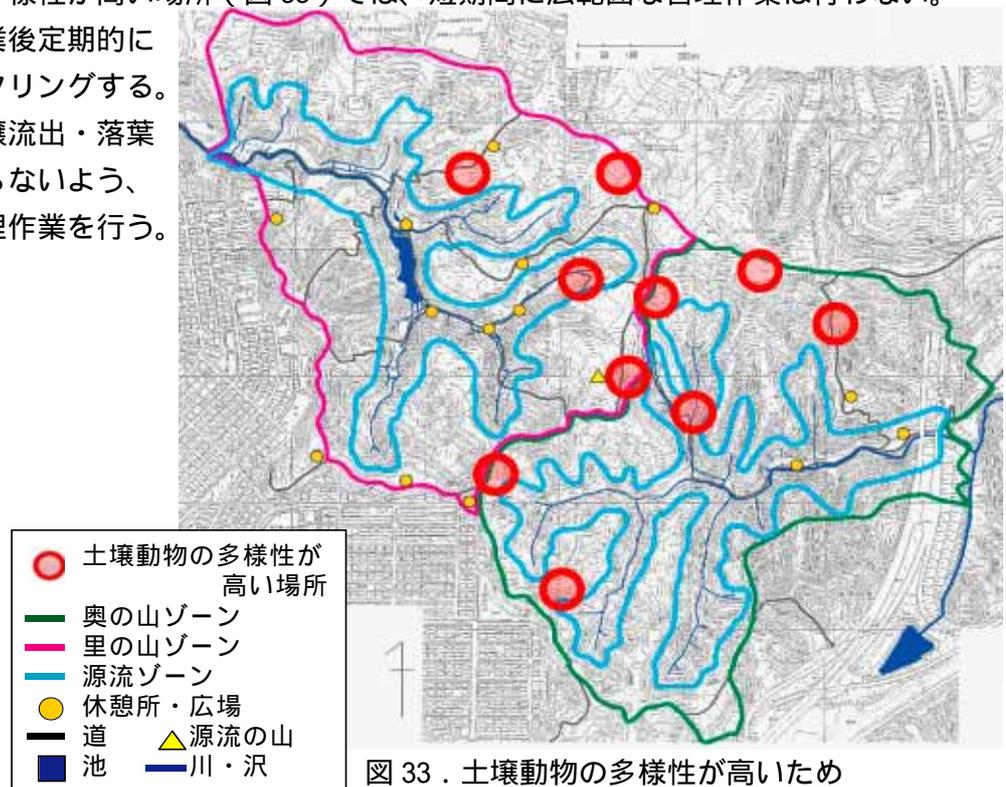


図 33 . 土壌動物の多様性が高いため
乾燥・土壌流出・落葉の欠如に注意する場所

エ 手をつけない区域の設置

- ・各管理作業地では、作業によって環境が変化するため、生物が逃げ込めるように、10%以上、手をつけない場所をつくる。

オ 大木

- ・大木を利用する生物のために、また散策路沿いの大木は境界木など歴史的に残されてきた可能性があるため、一抱え以上ある大木は、基本的に残す。

カ やぶ

- ・やぶを好む生物（タヌキ、ウグイスなど）のために、やぶも残す。
- ・ササ・アオキの繁茂の著しい場所を管理する場合には、これらを刈った後に生えてくる植物を同定（*種名を明らかにすること）および記録し、同定できない場合には、生えている場所や写真などを記録し、横浜市・専門機関等に同定を依頼する。

キ 枯木・枯枝

- ・枯木・枯枝を好む生物のために、散策路沿いなど安全確保が優先される場所以外は必要以上に管理整理せず、残しておく。管理作業中に切った幹・枝は、昆虫のために、日当たりの良い場所と日陰に積んでおく。

ク がけ

- ・がけの上下に家屋・散策路や水路などがなく、防災上必要でない場合には、がけ崩れも自然に起こる現象の一つであるため、崩れたがけ地を好む生物の生息場所として位置づけ、崩れても、補修・植栽などを行わない。

(2) 市民利用への配慮

ア 休憩所・広場

- ・休憩所・広場は、利用しやすいように除草するが、身近に昆虫や鳥などの生物が見られるよう、花の咲く木や草を一度に全部刈らずに残す。

イ 散策路沿い

- ・利用者が周囲の自然環境の景観と一体となった雰囲気を楽しみながら散策できるようにする(図34)。「山深さを感じる道」と「谷の深さを感じる道」では、散策路沿いの高木を残し、「谷戸の風景を楽しむ道」では、瀬上沢では湿り気のある様々な草丈の開けた草地と川を囲む樹林の斜面、氷取沢ではより溪谷に近い雰囲気を味わえるようにする。

ウ 眺望

- ・眺望の良い地点からは、丘陵や遠くの山や谷、池などが見渡せるよう、見晴らしの良い空間を維持する(図34)。

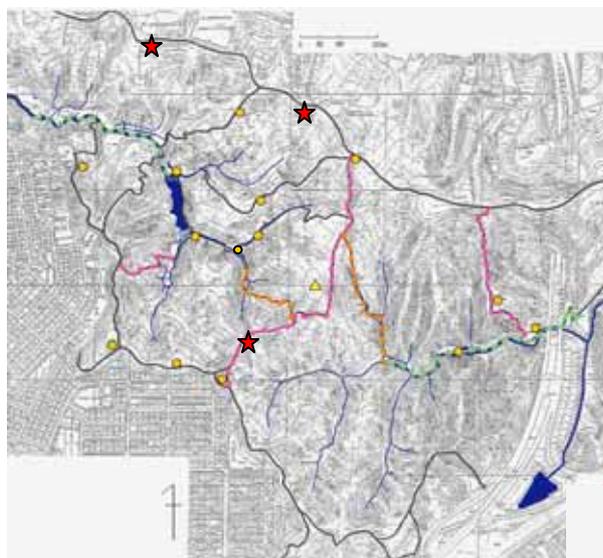
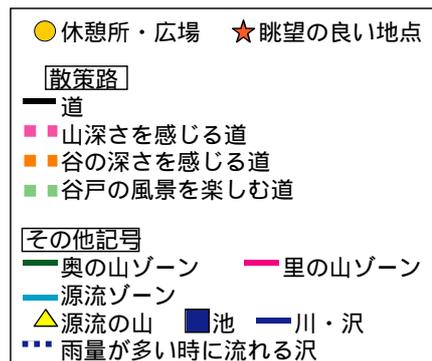


図 34. 散策路の景観と眺望の良い地点



ii) ゾーン別保全管理作業指針

(1) 奥の山ゾーン

目標植生

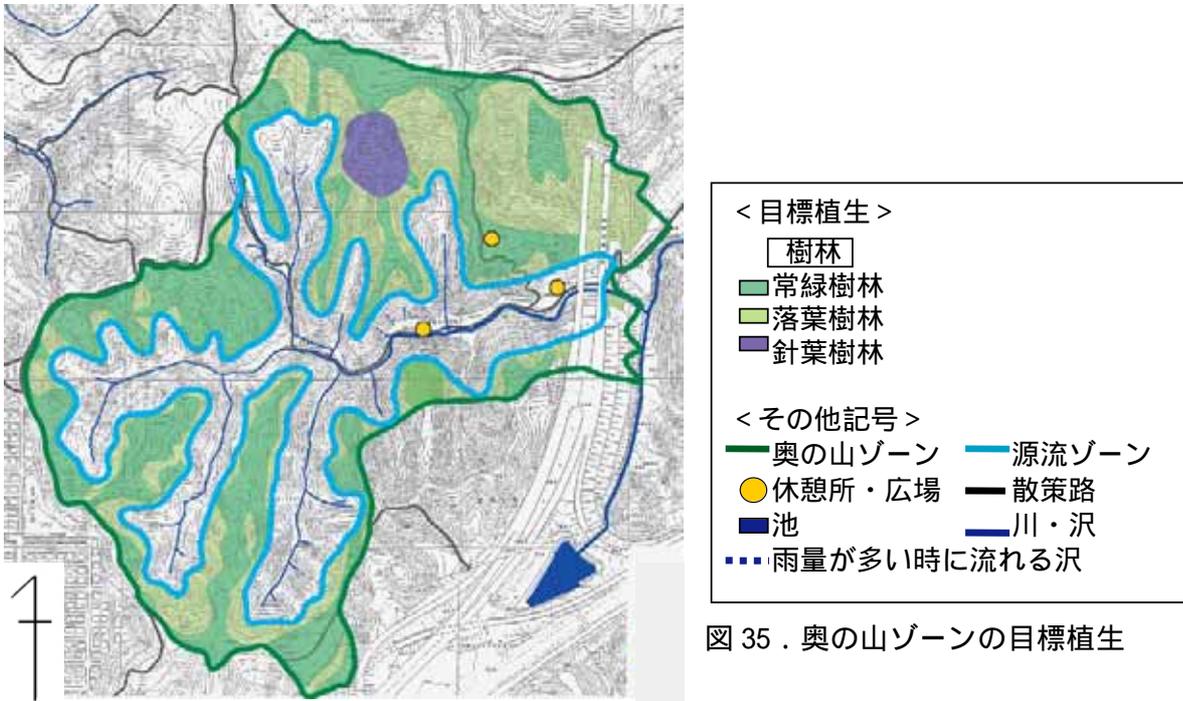


図 35 . 奥の山ゾーンの目標植生

目標とする環境と現況

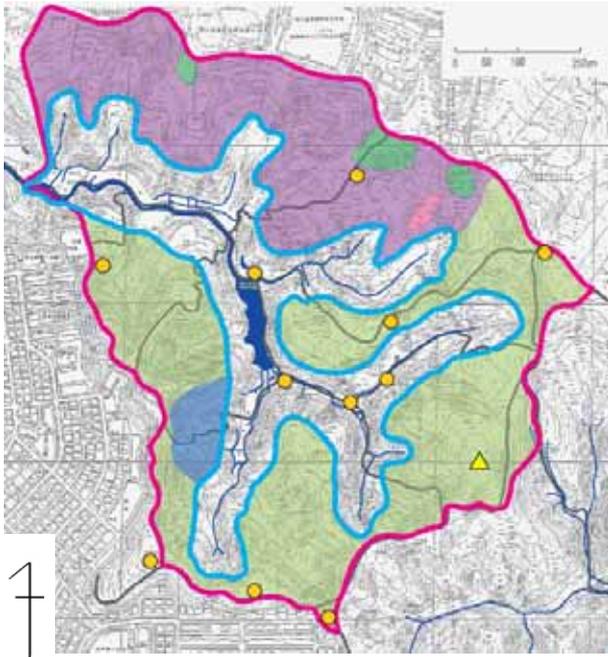
場所	目標植生	目標とする植物	目標とする その他の生物	現在の植生
緩やかな斜面、 尾根部の平地	常緑樹林 ■	(イノデ - タブノキ群集、 ヤブコウジ - スダジイ群集) シロダモ、アカガシ、アラカシ、 ヤブツバキ、ジャノヒゲ、ヒサ カキ、モチノキ、イタビカズラ、 ピナンカズラ、キツタ、テイカ カズラ、イヌビワ、タシロラン、 ウラシマソウ	サンコウチョウ アオゲラ クロジ クチキコオロギ ヤマトヒバリ ヒメスズ アオスジアゲハ	落葉樹林 落葉常緑混交 林 針葉樹林 (スギ・ヒノキ)
急斜面	落葉樹林 ■	(イロハモミジ - ケヤキ群集) コクサギ、アブラチャン、エン コウカエデ、カントウカンアオ イ	オオルリ、ヤブサメ キビタキ、ルリビタキ センダイムシクイ オナガアゲハ ゴイシジミ(ササやぶ)	落葉樹林 針葉樹林 (スギ・ヒノキ)
かつて地元中 学生が植林した 場所	針葉樹林 ■	大径木スギ林 リョウメンシダ、ヤブミョウガ、 他シダ類	キクイタダキ、クロジ サンコウチョウ ヒグラシ、ヒナカマキリ	針葉樹林 (スギ・ヒノキ)

保全管理作業指針

- ・ 木や竹が細く密に生えている植林、竹林から先に間伐等の作業を行う。
- ・ 常緑樹林・落葉樹林：これらの樹林を目標とする場所では、高木の皆伐や低木の除去を、短期間に広範囲で行うことはしない。落葉高木の更新作業方法としては、狭い範囲（2000 平米程度）の高木の皆伐または間伐後、自然に生える樹種を育成する方法や、植樹する方法などがある。
- ・ 急斜面は：防災上必要でない場合には、積極的には手を入れず、自然にまかせる。目標植生に向けて、針葉樹や常緑樹の伐採を行う方法もある。自然に遷移させた場合は時間はかかるが、急斜面ではケヤキなどの落葉樹林になる可能性が高い。
- ・ 針葉樹林：現在針葉樹林で、将来も針葉樹林として維持する場所では、まず小径木を伐採する。また、他の植物を生えにくくするヒノキを優先して伐採する。その後、針葉樹の定期的な間伐や伐採、植林、草刈り、枝おろしなどにより、針葉樹林を維持する。経済林ではないため、植林した木がある程度大きくなった後は、針葉樹の成長の妨げにならない限り、昆虫や、鳥などのために、樹林の下に生える低木や草、シダなどを残す。
- ・ 希少な生物の生息地（図 31・32）：一度に広範囲な大きな管理作業は行わない。また、生物のモニタリングを行い、生物に注意しながら管理作業を行う。

(2) 里の山ゾーン

目標植生



- < 目標植生 >
- 樹林
 - 常緑樹林
 - 落葉樹林
 - 混交林(常緑樹・落葉樹)
 - モザイクエリア(常緑樹林・落葉樹林・針葉樹林・竹林・草地)
- < その他記号 >
- 里の山ゾーン
 - 源流ゾーン
 - 源流の山
 - 休憩所・広場
 - 散策路
 - 池
 - 川・沢
 - 雨量が多い時に流れる沢

図 36 . 里の山ゾーンの目標植生

目標とする環境と現況

場所	目標植生	目標とする植物	目標とするその他の生物	現在の植生
落葉樹林	落葉樹林 (急斜面・谷部・湿った樹林)	(イロハモミジ・ケヤキ群集) コクサギ、アブラチャン、エンコウカエデ	オオルリ、ヤブサメ キビタキ、ルリビタキ センダイムシクイ	針葉樹林 (スギ・ヒノキ) 針葉落葉混交林
	落葉樹林 (尾根部・平らな部分・緩やかな斜面・乾いた樹林)	コナラ、ヤマザクラ、オオシマザクラ、ガマズミ、ムラサキシキブの仲間、スハマソウ、リンドウ、イチリンソウ、ニリンソウ、イチヤクソウ、ウゲイスカグラ、クロモジ、ハナイカダ	タヌキ、イタチ、フクロウ、オオタカ、ウグイス、ホトトギス、センダイムシクイ、オオミドリシジミ、アカシジミ、ゴマダラチョウ	落葉樹林
混交林	落葉常緑混交林	アワブキ、シロダモ、キンラン、ギンラン、カンアオイ	オオルリ	落葉常緑針葉混交林
モザイクエリア	常緑樹林	大径木のスダジイ、アカガシ	*奥の山ゾーン常緑樹林参照	常緑樹林
	落葉樹林	(ヌルデ・ヤマグワ群落、アカメガシワ・ミズキ群落、ヤツデ・カラスザンショウ群落、オニシバリ・コナラ群集) ヌルデ、ヤマグワ、ヤツデ、カラスザンショウ、アカメガシワ、コナラ、エンコウカエデ、エゴノキ、ヤマザクラ、オオシマザクラ、ウゲイスカグラ、ヤマツツジ、ヤマテリハノイバラ	ノウサギ タヌキ フクロウ カンタン	畑・落葉樹林
	針葉樹林	大径木スギ	*奥の山ゾーン針葉樹林参照	針葉樹林
	竹林	モウソウチク	ベニカミキリ	竹林
	草地 (草丈の高い草地・低い草地)	草丈の高い草地： ススキ、ナンバンギセル 草丈の低い草地： スゲ・カヤツリグサ・シバの仲間、チヂミザサ	草丈の高い草地： カヤヒバリ、カヤキリ 草丈の低い草地： エンマコオロギ ミツカドコオロギ 全般：ノウサギ、フクロウ、カンタン、モズ	畑

保全管理作業指針

- ・木や竹が細く密に生えている植林、竹林から先に間伐等の作業を行う。
- ・落葉樹林：
 - ・一部にササやぶも残すことで、やぶに依存する生物（ウグイス、ホトトギス、タヌキ、ヤブサメ、クロジなど）の生息場所を確保する。
 - ・落葉樹林を維持する方法の1つとして、コナラなど一部の樹木で、15年～20年程度で一度木を切り、切り株から生えた芽の3本程度を成長させる、萌芽更新を行う。
 - ・急斜面は防災上必要でない場合には、積極的には手を入れず、自然にまかせる。目標植生に向けて、針葉樹や常緑樹の伐採を行う方法もある。自然に遷移させた場合は時間はかかるが、急斜面ではケヤキなどの落葉樹林になる可能性が高い。
- ・混交林：常緑樹の大木を残し、落葉樹と混交している現状を維持。希少な落葉樹を残す。
- ・モザイクエリア：
 - ・現在、小規模の常緑樹林・落葉樹林・畑・竹林・針葉樹林が混在している。
 - ・将来も、これらの環境を混在させることで生物の多様性を保全する。
 - ・竹林は、広がらないように、現状の範囲に留めるように管理する。
 - ・常緑樹林は、小径木を伐採し、大木の常緑樹林にする。
 - ・畑は、将来、草丈を変えて、草丈の高い草地と、低い草地の両方にする。
- ・源流の山：2つの沢の源となるため、乾燥に注意する必要がある。管理作業の前と、作業後定期的に、乾燥度合いと生物多様性のモニタリングを、管理作業の前および作業後定期的に行い、高木や低木の伐採を、短期間に広範囲に行うことはしない。
- ・希少な生物の生息地（図31・32）：短期間に広範囲な大きな管理作業は行わない。また、生物のモニタリングを行い、生物に注意しながら管理作業を行う。

(3) 源流ゾーン

ア 全体

【川・沢】

- ・水系の周辺は生物が行き来するコリドー（回廊）として、また、生物が水場として利用する際の隠れ場所として保全するために、基本的に谷筋は改変しない。（円海山周辺の緑地の谷筋には、希少な生物が生息していることが多い）
- ・水の流れをせき止める倒木・散策路の歩行を妨げる倒木などは、脇に避ける程度にする。
- ・湿地に流れ込む、あるいは湿地から川本流へ流れ出す水量を数年ごとにモニタリングを行う。

【湿った草地】

- ・生物多様性保全のために、沢沿いに、草丈の高い草地と草丈の低い草地の両方がある状態にする。
- ・湿地性の生物保全のため、草地を乾燥させないようにし（図 37）、乾燥化や土壌堆積のモニタリングを行う。土砂の堆積や乾燥化のモニタリングは、草地の範囲を地図上に記録したり、植物相の変化を指標とする（図 38）。
- ・希少な生物の生息地（図 31・32）では、短期間に広範囲な大きな管理作業は行わない。また、生物のモニタリングを行い、生物に注意しながら管理作業を行う。
- ・湿った草地の中に散策路を通す場合には、木道等踏圧や乾燥化を避ける配慮をする（図 39）。
- ・休憩所・広場の草地は人が利用しやすいよう年 3 回程度除草して、草丈を低くするが、流れや止水を確保するため、刈った草や倒木類を水が流れる溝の上や、草地奥の山側の水がたまりやすいところには積み上げない。

【生物保護区】

- ・沢の最も上流の広い湿地（図 39, 40, 41 の ）は、目標植生だけではなく、そのような植生に特有の生物も生息できる場所として保全し、下流への生物供給源とするため、人の立入りを禁止して、生物保護区とする。
- ・生物保護区では、定期的に植物と土砂堆積・乾燥化のモニタリングを行い、悪化した場合には、掘り下げ等の水環境の改変を検討する。

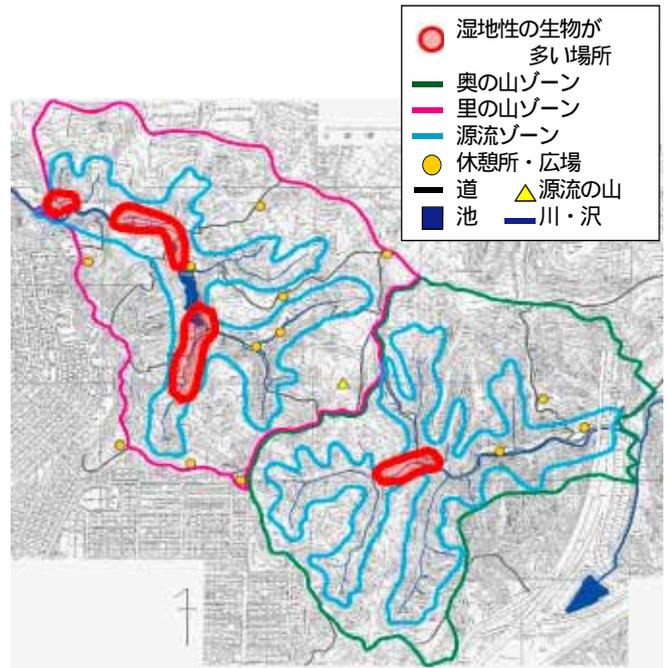


図 37. 湿地性生物の保全のため、特に乾燥化・土壌堆積に注意する草地

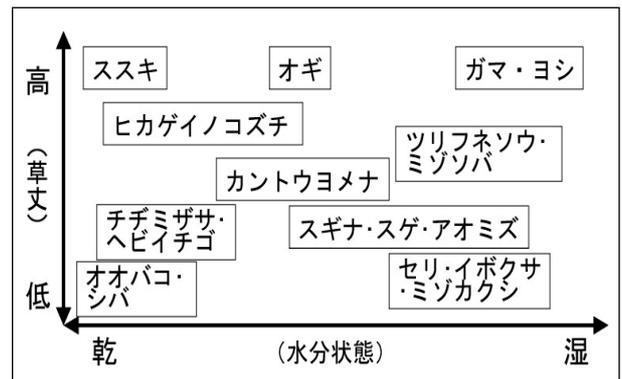


図 38. 草地の湿り具合と代表的な植物

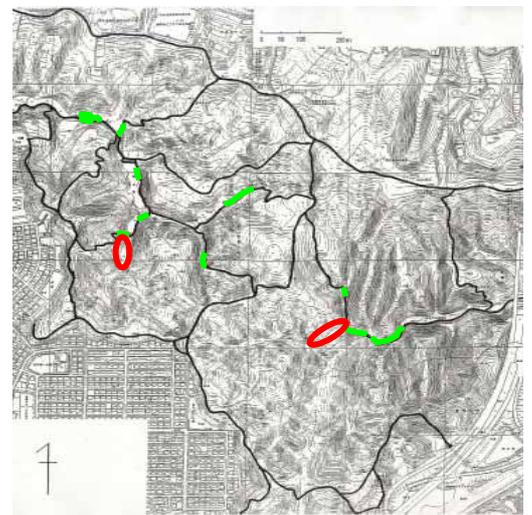


図 39. 木道(黄緑)と生物保護区(赤)の位置

イ 奥の山源流の湿った草地



図 40 . 奥の山源流の湿った草地の目標植生

< 目標植生 >		< その他記号 >	
 湿った草地	 樹林	 奥の山ゾーン	 源流ゾーン
 草丈の低い(20cm以下)草地	 常緑樹林	▲ 源流の山	 休憩所・広場
 草丈の中位(20～100cm)の草地	 落葉樹林	 散策路	 池
 草丈の高い(1m以上)草地		 川・沢	 雨量が多い時に流れる沢
 その他の草地		 生物保護区	

奥の山源流の目標とする湿った草地環境と現況および保全管理作業の指針

場所	目標植生	目標とする植物	目標とするその他の生物	現在の植生	それぞれの場所の保全管理作業指針
湿った草地	草丈20cm以下 	イボクサ、ミゾカケシ コケの仲間	ミソゴイ、ケラ、キアゲハ 止水：ヤマアカガエル、 ヒキガエル、ヘイケボタル	草丈の低い 湿った草地	散策路は木道等とし、人の踏圧から保護する。
	草丈20-100cm 	ミソソバ、ツリフネソウ、 タコノアシ、 ミズタマソウ	アカトンボ属、シオヤトンボ、 タカネトンボ、ヤスマツアメンボ、 クロスジギンヤンマ	中位の草丈の 湿った草地	乾燥した草地に生える植物が増えた場合には、掘り下げを行うなど、水環境の改変を検討する(図38参照)。
	草丈1m以上 	ガマ、ヨシ、シロバナサクラタデ、 ツリフネソウ、 ミソソバ	クイナ、キンヒバリ		草丈の高い湿地性の植物と、その下に生える草丈の低い湿地性植物や、そのような場所に生息する生物の保護区として、人の立入りを禁止する。
	その他の草地 	* 図38参照	【湿った草地】キアゲハ、ケラ、 キンヒバリ 止水：ヘイケボタル、 タカネトンボ、ヤスマツアメンボ、 クロスジギンヤンマ、 アカトンボ属、シオヤトンボ 【乾いた草地】 草丈高：クロコノマチョウ、 ギンイチモンジセセリ、 ジャノメチョウ 草丈低：エンマコオロギ 草地全般：クツワムシ (低木・つる)、カンタン(クズ)、 キタデハ、チョウセンカマキリ	様々な湿り具合の 草地	水がたまりやすい場所に、池または溝を掘り、止水性のトンボやカエル類の生息場所や産卵場所を創出することで多様性を高める。
川・沢		ヨゴレネコノメ、 ヤマネコノメ	オオルリ、コサギ、キセキレイ ホトケドジョウ、アブラハヤ、 シマヨシノボリ、ゲンジボタル、 ハグロトンボ、ミルンヤンマ、 コシボソヤンマ、オニヤンマ、 ヤマサナエ、ダビドサナエ、 モンキマメゲンゴロウ、 サワガニ、モクズガニ、 テナガエビ		川・沢の周囲は、基本的に、手をつけなくて維持する。 倒木・大規模な土砂崩れで水流が止められた場合には、水流を復興する。 湿地に流れ込む、あるいは湿地から川本流へ流れ出す水量を数年ごとにモニタリングを行い、保全策が必要かどうかを検討する。 湧水を必要とする魚類も生息しているため、水温の低い小さな流れを止めないようにする。
急斜面	落葉樹林 	* 奥の山ゾーン落葉樹林参照	* 奥の山ゾーン落葉樹林参照	落葉樹林	急斜面は落葉樹林を目標とする(図22参照)。

ウ 里の山源流の湿った草地

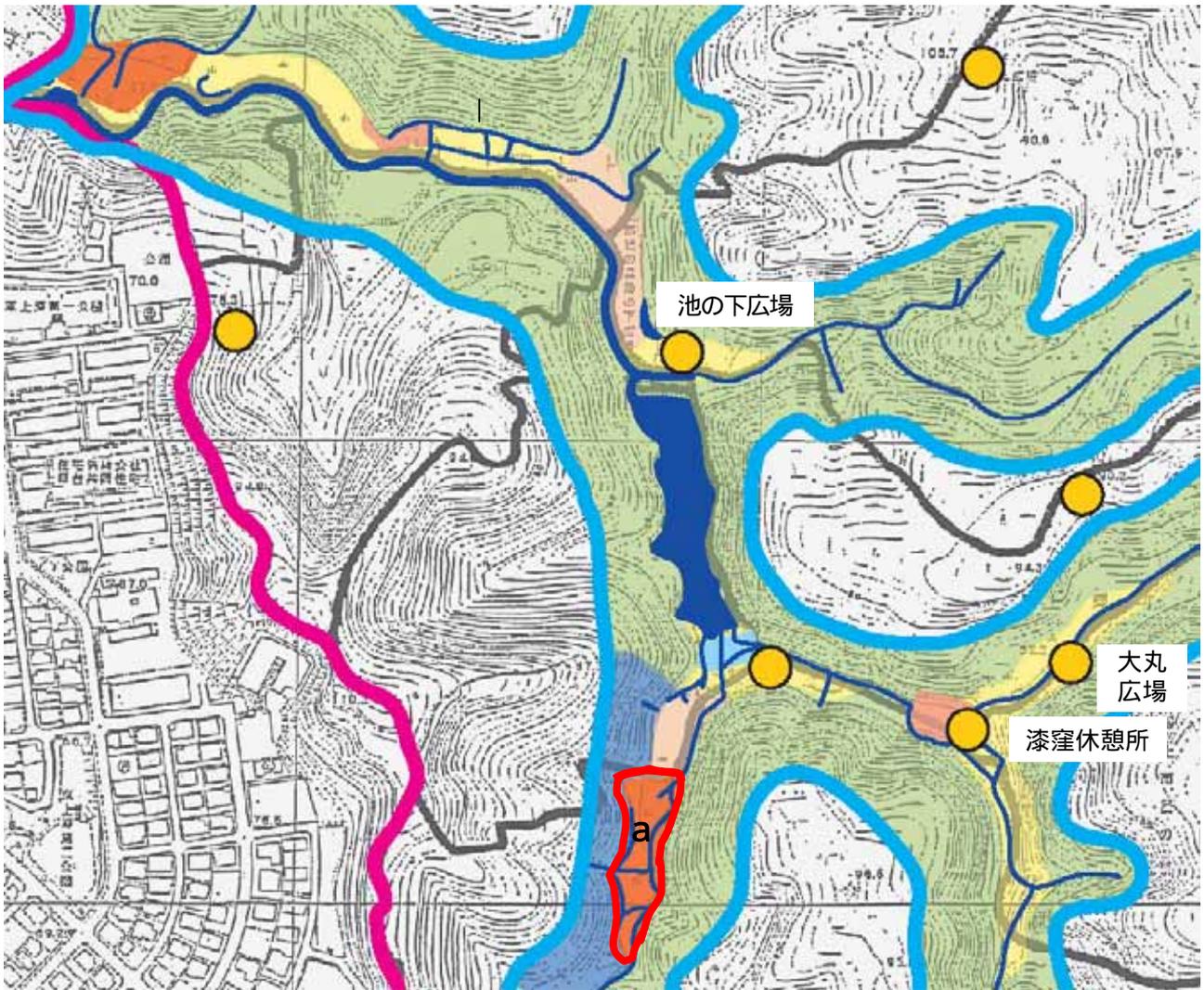


図 41 . 里の山源流の湿った草地の目標植生

< 目標植生 >		< その他記号 >	
湿った草地		樹林	源流ゾーン
草丈の低い(20cm以下)草地	落葉樹林	里の山ゾーン	源流の山
草丈の中位(20~100cm)の草地	混交林	源流の山	散策路
草丈の高い(1m以上)草地	湿地性樹林	散策路	川・沢
その他の草地		川・沢	池
		生物保護区	雨が多い時に流れる沢

里の山源流の目標とする湿った草地環境と現況および保全管理作業の指針

場所	目標植生	目標とする植物	目標とするその他の生物	現在の植生	それぞれの場所の保全管理作業指針
湿った草地	草丈20cm以下 	イボクサ、ミゾカクシ、コケの仲間	ミゾゴイ、ケラ、キアゲハ 止水：ヤマアカガエル、ヒキガエル、ヘイケボタル、アカトンボ属、シオヤトンボ	草丈低い湿った草地	希少なコケ類のある場所は、乾燥化を防ぎながら、年3回程度の草刈りによって草丈の低い湿った草地を維持する。
	草丈20-100cm 	ミゾソバ、ツリフネソウ、タコノアシ、ミズタマソウ		中位の草丈の湿った草地	乾燥した草地に生えるオギ、セイタカアワダチソウが増えた場合には、掘り下げを行うなど、水環境の改変を検討する（図38参照）。
	草丈1m以上 	ガマ、ヨシ、シロバナサクラタデ、ツリフネソウ、ミゾソバ	クイナ、キンヒバリ	草丈高い湿った草地	ヨシ、ガマは、部分的に少しずつ数年に1度刈り、堆積している古い枯れた植物を除去する。刈る時期は、ヨシ、ガマを維持するために、栄養を貯める夏には刈らず、秋～冬に。 ヨシやガマがオギ原に変化しつつあるか、セイタカアワダチソウが増加した場合には、水分が不足して乾燥化が進んでいるか、または、土が堆積している可能性があるため、掘り下げや、水環境の改変を検討する（図38）。 草地aはヨシ原の生物保全のため、生物保護区として人の立入りを禁止する。
	その他の草地 	* 図38参照	【湿った草地】キアゲハ、ケラ、キンヒバリ 止水：ヤマアカガエル、ヒキガエル、ヘイケボタル、アカトンボ属、シオヤトンボ 【乾いた草地】 草丈高：ホオジロ、クロコノマチョウ、ギンイチモンジセセリ、ジャノメチョウ 草丈低：エンマコオロギ 草地全般：クツムシ(低木・つる)、カンタン(クズ)、キタテハ、チョウセンカマキリ	様々な湿り具合の草地	乾きかけた草地には、セイタカアワダチソウが多いが、山側の水分の多い場所にはコガマなど、他には生育していない植物もあるため、園路沿いは毎年3回程度草刈りを行うが、山側は刈り残して、部分的に少しずつ数年に1度草刈りを行い、これらの湿った草地に生える植物を保護する。 クツムシやカネタタキなどの昆虫のために、一部に低木やツルを残す。 水がたまりやすい場所に、池または溝を掘り、止水性のトンボやカエル類の生息場所や産卵場所を創出することで多様性を高める。
湿地性樹林	湿地性樹林 	ヤナギの仲間、ハンノキ	ハンノキハムシ		湿地性樹林とその下に生える植物の保護のため、年に1回の草刈りを行う。
川・沢		ヨゴレネコノメ、ヤマネコノメ	オオルリ、コサギ、キセキレイ、ホトケドジョウ、アブラハヤ、シマヨシノボリ、ゲンジボタル、ハグロトンボ、ミルンヤンマ、コシボソヤンマ、オニヤンマ、ヤマサナエ、ダビドサナエ、モンキマメゲンゴロウ、サワガニ、モクスガニ、テナガエビ		川・沢の周囲は、基本的に、手をつけずに維持する。 倒木・大規模な土砂崩れで水流が止められた場合には、水流を復興する。 湿地に流れ込む、あるいは湿地から川本流へ流れ出す水量を数年ごとにモニタリングを行い、保全策が必要かどうかを検討する。
池		コガマ、カンガレイ、サンカクイ、ホタルイ	ヤマアカガエル、ヒキガエル、カルガモ、カイツブリ、ギンヤンマ、コシアキトンボ、ショウジョウトンボ、ウチワヤンマ、イシガイ、ヌカエビ、トウヨシノボリ		瀬上池は、止水性の生物多様性保全の機能を保つようにする。土砂の堆積や乾燥化をモニタリングし、また、オギ原やセイタカアワダチソウが広がった場合には、掘り下げなどを検討する。
急斜面	落葉樹林 	* 奥の山ゾーン落葉樹林参照	オナガアゲハ(コクサギ) * 奥の山ゾーン落葉樹林参照	落葉樹林	急斜面は落葉樹林を目標とする（図22参照）。
混交林	混交林 	* 里の山ゾーン混交林参照	* 里の山ゾーン混交林参照	混交林	* 里の山ゾーン混交林参照